

平城宮・京出土の「麦垵」

平城宮や平城京で出土する墨書土器のなかに、「麦」と書かれた須恵器垵があります。なかには底部外面に「麦垵」と墨書した例もあり、「麦」字が「麦垵」の符牒であったことがうかがえます。その口径は17.0～20.0cm、器高は5.0～7.5cmで、須恵器食器のなかでは大きめの深形垵になります。

天平宝字2年(758)におこなわれた金剛般若経一千巻および千手千眼経一千四百巻書写事業のときには、この麦垵を150口請求しており(「東寺写経所解案」、『大日本古文書(編年)』13巻476・477頁)、麦垵が「麦すなわち索餅さくべい(小麦を材料とする手延べ麺とされる)を食べるための食器であったと推定できます。しかしながら、このときは麦垵の代わりに「水垵みずまり」が支給されており(「食料雑物納帳」、『大日本古文書(編年)』13巻254～257頁)、類似器種で代用されたことが知られています。

「正倉院文書」に登場する食器の名前と、平城宮・京出土の墨書土器とが符合したことで、奈良時代における食器の用途や役割が少しずつあきらかになってきました。(都城発掘調査部 森川 実)



「麦」字原寸大写真(平城京二条大路 SD5100 出土)